

## E T A - R O C 派遣・招待講演を終えて

峯石 緑

(広島国際大学 国際交流センター 外国語教育研究室)

日本ではようやく例年になく厳しい暑さを越し、秋の気配を感じ始めた本年 11 月半ばに、A L A K 2006 に続いて光栄にも E T A - R O C 2008 年次国際大会日本代表に選んで頂いたことに非常な喜びと責任感を感じつつ、生まれて初めて台湾の地を踏んだ。

広島から 1 日 1 便のみ出ている航空機の便の都合で、大会前日から会場の宿泊施設に滞在させて頂き、会場設営の最中の主催者の方々と挨拶を交わし、その後翌日に控えている自分の発表の準備に取り掛かった。会場内の宿泊施設は非常に快適で、前方にグランド・ホテルを仰ぐ清潔な広々としたツイン・ルームであり、台湾調の装飾も施されていた。招待客の食事は会期中 3 食とももてなされ、フロント横にはコンビニもあり、終始リラックスした気分で大会を過ごすことができた。

今大会のテーマは ”Holistic Approaches to English Teaching and Learning” というものであった。オープニング・セレモニー最後に、各国からの基調講演者および代表招待講演者の紹介があり、その直後、David Little 先生による “Developing a Holistic Approach to Language Teaching and Learning at University: A European Perspective” と題された講演が、メイン・ホールで行われた。

本講演は、Council of Europe による *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment* (Cambridge University Press 2001) の枠組みの中で大学において一貫して使用される the European Language Portfolio による学習者の自律育成の仕組みをパワー・ポイント提示、ハンドアウトさらに手元の大会プロシーディングを周到に準備して行なわれた実に分かりやすく興味深いものであり、フロアからは時間切れまで質問が止むことはなかった。筆者自身もポートフォリオを用いた学習者自律育成プログラムを実施した経験から、非常に意義深く拝聴した。

この後に Dr. Mary Ann Christison、Dr. Paul Nation、Dr. Michael Lost、Dr. Adrian Palmer はじめ世界各国からの豪華なゲスト・スピーカーによる講演・ワーク・ショップが会期中ずっと開かれ、どれも予め列を作ってホ

ール前で並んで待つ程の盛況ぶりであった。ゲスト・スピーカーの講演やワーク・ショップでもオーディエンスのマナーは徹底しており、講演では皆が熱心に聴講し質問をし、ワーク・ショップでは学生に戻ったかのように生き生きと、様々な人とゲームやディスカッションを行った。

筆者の発表は大会初日 13 日の午後からだったお陰か、殆どの席が各国の人々で埋められ、かつての恩師 **Dr. Paul Nation** ばかりか、今回あらゆる面でご指導頂いた京都外国語大学の相川 真佐夫先生もいらしてください、質問も活発で、期待以上の達成感を感じることができた。質問して下さった台湾人の研究者とは改めて後ほど個人的にお話し、彼女と共同研究をしようという話になった。この時の発表テーマは「東アジアの英語学習者の自律とは何か」を把握し、「自律学習を促すにはどのような工夫が必要か」「そもそも学習者は自律学習を望んでいるのか」というものであり、台湾の研究者にとっても非常に興味深い研究課題であるとお褒めの言葉を頂いた。

どの部屋も聴講者で溢れかえっている基調講演を、列に並んで待っていても入れなかったプログラムを除き殆ど拝聴し、改めて研究心に火がつくような感銘を受けた。また、この時程アジア圏の言語が全くできない自分を反省したこともなかった。当然ながら中国語での発表も多く、授業実践について等のオーセンティックな情報交換をするにはやはりアジアの言語を自分自身第 3 言語として習得しておくべきだったと己の怠慢さが残念であった。そんな中、時間を工夫して台湾の男性研究者の「オーセンティックな教材が学習者の自律にどのように貢献するか」という発表を聴き、「実験群と統制群を設けて **follow-up study** をしてみてもは？」と質問すると、彼とも「自律」をテーマとした共同研究を進めていくべくメールで討議していこうという話になった。

一方、前大会会長であった **Dr. Andy Leung** も言及されていたが、台湾の発表者の発表キャンセルが一部あったことは、とりわけ、自分の是非とも聴講したかった「自律」についての発表がキャンセルされておりフロアから活発に質問しようと楽しみにしていたこともあり、少し残念であった。しかし、各国からの基調講演者の顔ぶれおよび講演は、まさに世界大会に相応しいものであった。

E T A - R O C ではブック・フェアが同時開催されるが、クリスマス・オーナメントを美しく施した会場で、4 - 5 歳の子ども達が我先にと絵本を選び両親に音読してみせる様は、微笑ましさとともに、台湾において幼

児英語教育の普及が非常に盛んであることをも新たに感じさせた。児童達がまるで母語を話すように流暢に英語を音読していた様子には、実際驚かされた。

また、ALAKも素晴らしい大会であったが、今回ETA-ROCでは会場受付・案内を全て学部3年生の学生（必ずしも英語専修ではない）が執り行っており、その英語の流暢さ、そして屈託なさには驚き心洗われる思いであった。巷には日本のファッション誌が出回り、テレビ番組も日本のものが散見される。J-popも盛んに聞かれた。日本の大学生が必ずしも彼ら程英語が流暢で教師に人懐こいとは言えないことを考えると、新しくて古い、面白い現象であると感じた。英文の直筆の手紙と筆者を含むみんなの似顔絵のイラストをプレゼントされたことも嬉しい驚きであった。

台湾文化の背景にはこれまでの複雑な社会的・歴史的土壌が大きく関わっていると考えられる。それを「一見さん」でしかない筆者がどうこう語ることはこの報告書のスコープを越えていよう。ただ、今回の派遣・招待を経験して、自分自身の研究の主軸が大きく影響を受けたことは否めない。それは、今後さらに英語教育を深い視点から考え直していこうと決心させてくれた程である。

最後に、改めてこの貴重な大会に出席させてくださったJACET関係各位、とりわけご多用中一度々主催者側と連絡を取ってくださり様々なお助言をくださった相川 真佐夫先生に深くお礼申し上げます。